

平成24年度調剤報酬改定による薬剤師業務アウトカム調査

三浦 洋嗣

公益社団法人日本薬剤師会 相談役
(助成時：公益社団法人日本薬剤師会 副会長)

【スライド-1】

始めに、本調査研究に助成をいただきましたファイザーヘルスリサーチ振興財団に感謝を申し上げます。

【スライド-2】

前回の診療報酬・調剤報酬改定では、患者への薬学的管理指導の充実を図る観点から、お薬手帳を通じた薬剤情報提供、残薬確認、後発医薬品に関する情報提供等を包括的に評価するよう、薬剤服用歴管理指導料の見直しが行われました。その改定後の薬剤師の服薬指導による残薬の変化、および薬剤費の経済的効果、お薬手帳の利用による薬学的管理状況、それらをはじめ、その活用方法など、基礎的データとして、また今後の見直しも視野に入れて、データをを得ることを目的として今回実施しました。

この調査研究では、日本薬剤師会のサポート薬局1,023カ所を対象として、アンケート調査を実施しています。調査では、その薬局の基本情報とか、来局患者の残薬状況、それから残薬が発見されてから薬剤師が実施した服薬支援等の内容も把握しています。

その他に今回、全国の内科系診療科目を標榜する診療所1,000カ所を対象としてアンケート調査を実施し、これは日本薬剤師会による独自調査ではありますが、医師によるお薬手帳の利活用の状況や要望を把握し、薬局あるいは患者調査との比較も行っています。

今回、この薬局アンケート調査は、対象薬局において平成25年10月31日に来局した患者さんのうち、過去1年以上にわたり定期的に来局しており、薬歴等の情報から過去の服薬指導や残薬確認の有無、疑義照会の有無のデータが確認でき、かつ慢性疾患に対する処

スライド-1

調剤報酬改定による薬剤師業務 アウトカム調査

第21回ヘルスリサーチフォーラム
2014年11月29日(土)
日本薬剤師会 副会長 (現:相談役)
三浦洋嗣

スライド-2

【背景と目的】

平成24年度診療報酬(調剤報酬)改定では、患者への薬学的管理指導の充実を図る観点から、お薬手帳を通じた薬剤情報提供、残薬確認、後発医薬品に関する情報提供等を包括的に評価するよう、薬剤服用歴管理指導料の見直しが行われた。同指導料に基づく薬剤師業務の効果を実証的に検証し、データを得ることは、今後の薬剤師業務に関するアウトカム評価を判断する上で重要であることを踏まえ、本調査研究はその効果計測を行うため、改定後の薬剤師の服薬指導による残薬変化及び薬剤費の経済的効果、お薬手帳の利用による薬学的管理状況をはじめ、その活用方法や記録内容(項目)の見直しに向けた基礎的データを得ることを目的として実施した。

【研究内容】

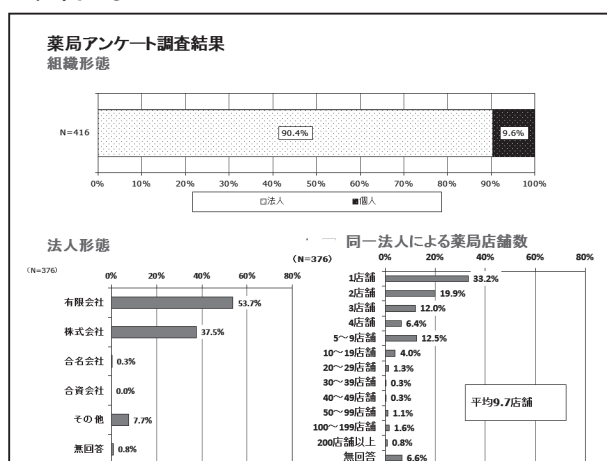
本調査研究では、日本薬剤師会のサポート薬局1,023カ所を対象として、アンケート調査を実施した。調査では、対象薬局の基本情報やお薬手帳の利活用の状況を把握するとともに、来局患者の残薬状況や残薬が発見されてから薬剤師が実施した服薬支援等の内容を把握した。また、患者側から見た薬剤師の対応等への満足度やお薬手帳の利用状況等についての回答を得た。他に、全国の内科系診療科目を標榜する診療所1,000カ所を対象として、アンケート調査(日本薬剤師会による独自調査)も実施し、医師によるお薬手帳の利活用の状況や要望を把握し、薬局、患者調査との比較で検討を行った。

方がなされ、28日以上長期投与の患者に限定して、調査対象日に該当する先着5名までの患者さんを対象としました。

【スライド-3】

このスライドは対象薬局の基本情報を示したもので、組織形態としては法人が90.4%、個人が9.6%。法人形態としては、有限会社が53.7%、株式会社が37.5%。同一法人による薬局店舗数は、1店舗だけが33.2%、2店舗が19.9%でした。

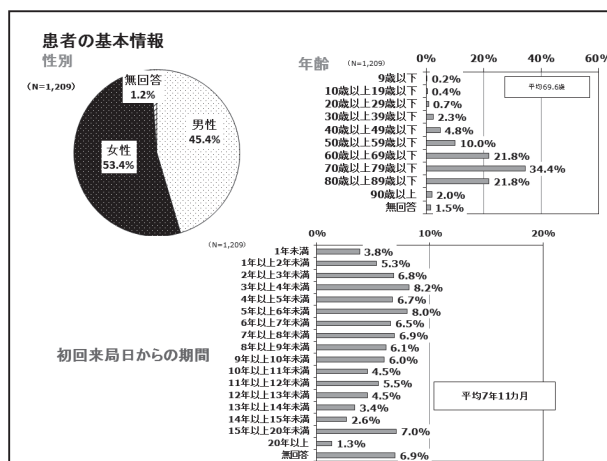
スライド-3



【スライド-4】

こちらは対象患者の基本情報で、患者票の対象患者1,209名の性別は、男性が45.4%、女性が53.4%。平均年齢は69.6歳。過去1年以上、定期的に来ている患者の初回来局日からの期間は、平均で7年11カ月でした。

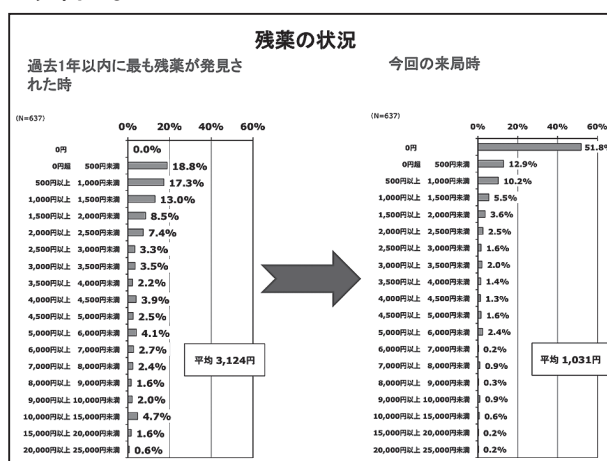
スライド-4



【スライド-5】

残薬の状況について、有効回答のあった対象患者637名のうち過去1年以内に最も残薬が発見されたときの金額は、0円超500円未満が18.8%で最も多く、次いで500円以上1,000円未満の17.3%で、平均が3,124円でした。そして、同じ637名の今回の来局時の残薬の金額は、0円が51.8%で最も多く、次いで0円超500円未満の12.9%でした。平均1,031円であり、過去1年以内に最も残薬が発見されたときよりも2,093円減少していました。

スライド-5



【スライド-6】

過去1年以内に最も残薬が発見されたときの、その残薬となった理由としては、「飲み忘れがあったため」が53.8%で最も多く、次いで「患者が服薬量を自己調節していたため」が

31.6%でした。

過去1年以内に最も残薬が発見されたときから実施した服薬指導等の状況については、「服薬指導の徹底」が81.5%で最も多く、次いで「お薬手帳の利用」が59.5%、「一包化等の服薬支援の実施」が22.4%でした。

【スライド-7】

過去1年以内における疑義照会の実施状況について対象患者1,209名で見ると、「実施しなかった」が60%、「実施した」が37.7%でした。さらに疑義照会を実施した患者について内容を尋ねたところ、「残薬による処方日数調整の確認」が36.4%と最も多く、次いで「処方せんの記載漏れや判読不能」25.2%という順でした。

【スライド-8】

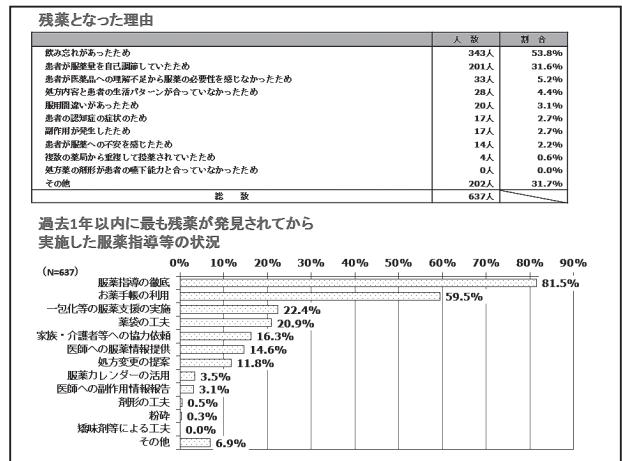
これは過去1年以内における後発医薬品への変更調剤の状況についての調査です。最も多いのが、「変更できるものがあったが今回は変更しなかった」で36.8%。次いで「変更した」が29.8%。そして23.3%は「以前に変更したため今回は変更する必要はなかった」という、変更調剤の状況です。

過去1年以内に発見された患者の問題としては、「重複投薬」が5.5%、それから「相互作用の問題」…これはOTCも含めてであります、2.2%。副作用が9.6%でした。

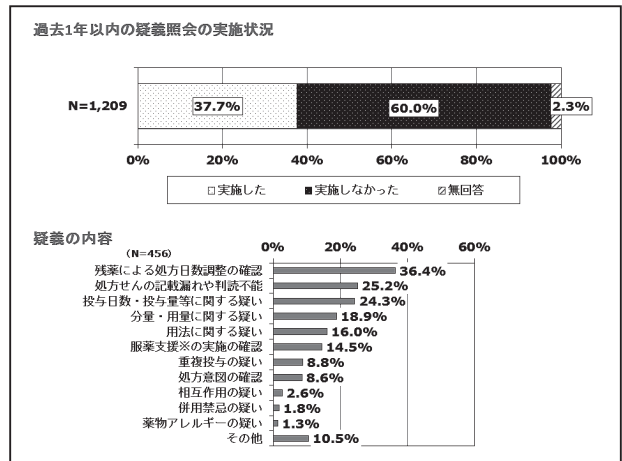
【スライド-9】

次は医療機関アンケート調査で、全国の内科系診療科目を標榜する一般診療所1,000カ所を対象として「お薬手帳の効果・有用性に関する調査」を実施し、322施設から回答を得ました。院外処方の実施状況について見ると、「全て院外処方」が52.5%、次いで「一部院内処方」が25.5%で、「全て院内処方」が21.4%でした。

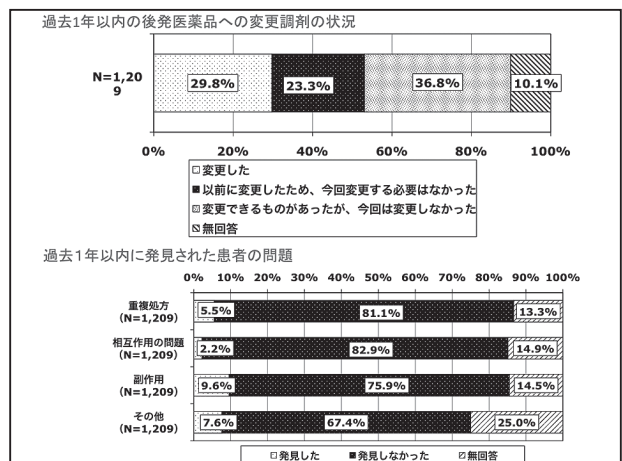
スライド-6



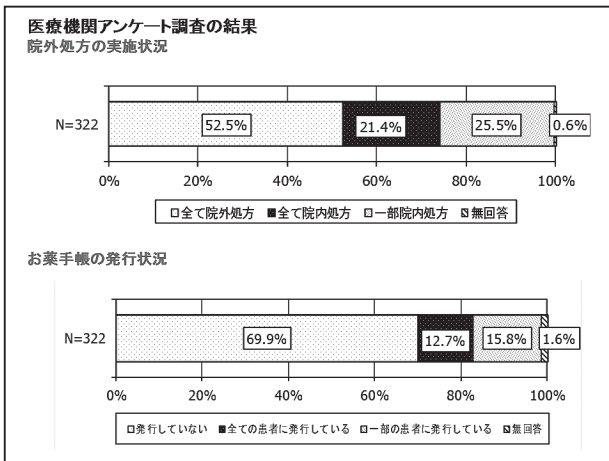
スライド-7



スライド-8



スライド-9



お薬手帳の発行状況ですが、「発行していない」が69.9%で最も多く、次いで「一部の患者に発行している」15.8%、「全ての患者に発行している」12.7%でした。

【スライド-10】

お薬手帳で医師が有用と思う事項として、「薬品名」82%が最も多く、次いで「投与日数・投与量」41.3%、「用法・用量」34.8%、「他科受診の有無」27.3%ですが、薬局の薬剤師のほうは「他科受診の有無」が68%で最も多く、次いで「薬品名」59.9%、「副作用歴」40.4%、「禁忌薬」24.5%の順です。

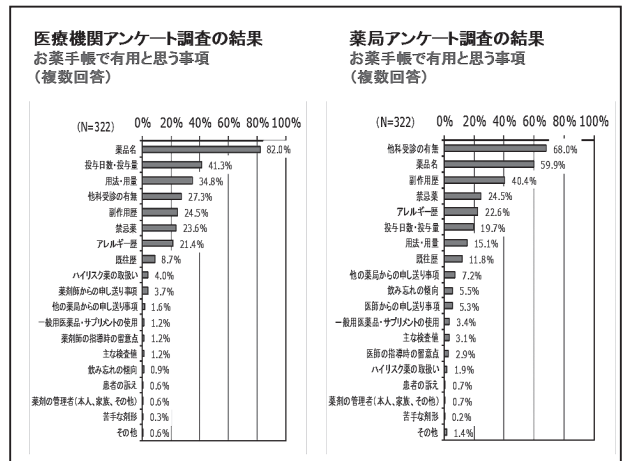
【スライド-11】

薬局アンケート調査における対象患者に対するお薬手帳使用状況については、「利用した」が89.7%、「利用しなかった」は8.2%でした。

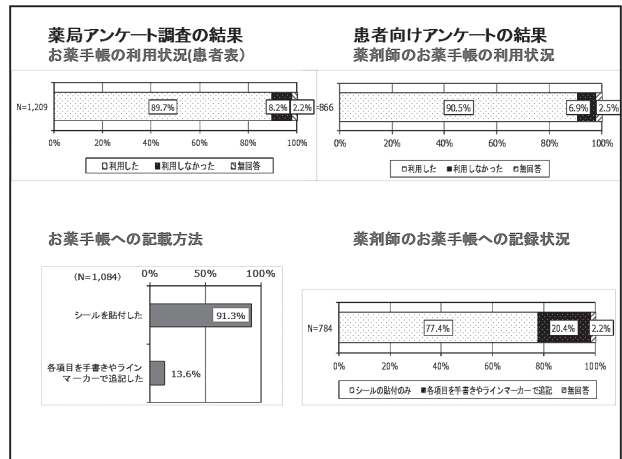
【スライド-12】

服薬指導と残薬変化に関する調査のまとめとして、繰り返しになりますが、残薬の状況について過去1年以内に最も残薬が発見されたときの金額は、平均で3,124円。そして服薬指導後には、最も残薬が発見されたときよりも2,093円減少していたということで、これは残薬が発見されたときから実施した服薬指導やお薬手帳の利用、一包化など服薬支援によるものと考えられます。

スライド-10



スライド-11



スライド-12

【まとめ】

1. 服薬指導と残薬変化に関する調査

- 薬局アンケート調査の対象患者1,209名の性別は「男性」45.4%、「女性」53.4%であった。年齢は「70歳以上79歳以下」34.4%が最も多く、次いで「80歳以上89歳以下」21.8%であった。
- 残薬の状況について有効回答があった対象患者637名について、過去1年以内に最も残薬が発見された時の残薬の金額は「0円超500円未満」18.8%が最も多く、次いで「500円以上1,000円未満」17.3%であった。また、平均3,124円であった。
- そして、同じ637名の今回の末局時の残薬の金額は「0円」51.8%が最も多く、次いで「0円超500円未満」12.9%であった。また、平均1,031円であり、過去1年以内に最も残薬が発見された時よりも2,093円減少していた。
- 過去1年以内に最も残薬が発見された時の残薬の理由としては、「飲み忘れがあったため」53.8%が最も多く、次いで「患者が服薬量を自己調節していたため」31.6%であった。
- また、過去1年以内に最も残薬が発見された時から実施した服薬指導の状況としては、「服薬指導の徹底」が最も多く、次いで「お薬手帳の利用」、「一包化等の服薬支援の実施」であった。

【スライド-13】

また、お薬手帳の効果・有用性のまとめとして、医療機関におけるお薬手帳の発行状況は、「発行していない」が69.9%で最も多かったわけですが、薬局におけるお薬手帳の利用状況は、「利用した」が89.7%であり、薬局と医療機関ではお薬手帳の意識の違いが明らかになりました。またお薬手帳の情報が不足していると思われる事項という調査では、「医師からの申し送り事項」や「主な検査値」などがあって、今後お薬手帳を介した医療機関と薬局の連携が進むことが期待されると考えます。

最後に、お薬手帳の電子化については、いろいろな動きや意見があり、現状では医療保険と結び付けて考えるのは難しいと思われませんが、患者と医療従事者にとってどういう形が望ましいかを今後考えて、また前に進んでいくべきと考えています。

スライド-13

【まとめ】

2. お薬手帳の効果・有用性に関する調査

- 医療機関アンケート調査から、医療機関におけるお薬手帳の発行状況についてみると「発行していない」69.9%で最も多く、次いで「一部の患者に発行している」15.8%、「全ての患者に発行している」12.7%であった。
- お薬手帳で有用と思われる事項としては「薬品名」が最も多く、次いで「投与回数・投与量」、「用法・用量」、「他科受診の有無」であった。
- 薬局アンケート調査から、薬局におけるお薬手帳の利用状況についてみると、「利用した」89.7%、「利用しなかった」8.2%であり、薬局と医療機関とではお薬手帳への意識の違いが明らかになった。
- 薬局で薬剤師が有用と思う事項としては「他科受診の有無」が最も多く、次いで「薬品名」、「投与回数・投与量」、「副作用歴」であった。
- お薬手帳で情報が不足していると思われる事項としては「医師からの申し送り事項」が最も多く、次いで「主な検査値」、「医師の指導時の留意点」、「他の薬局からの申し送り事項」であり、今後お薬手帳を介した医療機関と薬局との連携が進むことが期待される。
- お薬手帳の電子化については賛否両論であり、電子お薬手帳の利便性を評価する声もあれば、高齢者には操作しにくいことや災害時に機能しないのではないかと考えから否定的な立場からの声も寄せられた。

質疑応答

会場： 今のお話の中で、残薬に関わる問題でお薬手帳の利用ということをご発表になっていたのですが、処方変更への提案といったような内容かと思っただけですが、残念ながら最後の数値を見ますと、医師への申し送りに関しては3%以下の数字でしかなかったといったところで、全体的にどう読んでいいのかがちょっと分からなくなっています。一つ説明いただければと思います。

三浦： 残薬とお薬手帳の関係というご質問かと思えます。お薬手帳というのはいろいろな使い方あって、基本的には患者さんのものだと思っていますので、そこに例えばマーカー等で「このお薬はどのくらい余っているか、家に帰って自分で数えて、次のときに『処方調整してください』と先生にお話ししてください」と記載するとか、使い方はさまざまです。

薬局の薬剤師と患者さんの関係によって、今ここでお医者さんに処方変更してもらおうような疑義照会する場合とか、患者さんのほうが「直接、次に先生に言います」とか、いろいろなパターンがありますが、そのときにお薬手帳を用いている場合もあるかと私は理解しています。

座長： 残薬が出る一番大きな理由に、飲み忘れが多かったように思うのですが、そのあたり、今のお話とも絡むのですが、飲み忘れというのは飲まなくてもそれで済んでしまったわけですね。ということは、最初からそれは不要だったのか。そのあたりを患者さんがどのように理解されているのかというのが、一つポイントになると思うのです。残薬は、比率的にも非常に多かったですね。

三浦： 私も何度か経験があるのですが、患者さんというのは「飲んでます。飲んでます」というお答えが非常に多いのです。何かの機会のときに、「ちょっと変だな」と思って、もう一回筋道立ててお話をすると、実は飲んでいなかったということがしばしばあります。そのときに「その話を、今ここで直接私のほうからお医者さんにお話ししたほうがいいですか、あるいはご本人さまから次に言いますか」と申し上げたり、患者さんによってその言い方は変えますが、そういうお話の仕方で行っていると理解しています。